OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「言いさし文」による語用論的意味についての覚書
Author(s)	中田, 一志
Citation	日本語・日本文化. 2021, 48, p. 147-168
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

「言いさし文」による語用論的意味についての覚書

中田　一志

0．はじめに

言いさし文を体系的に記述した代表的な研究に白川（2009）がある。そこでは「主節を伴わずに従属節のみで表現される文を広い意味で言いさし文」とし、従属節だけで言いたいことを言い終えてるかどうかで次のように分類している（pp. 7-11）

(1) a. 言うべき後件を言わずに中途で終わっている文（「言い残し」）
　　b. 従属節だけで言いたいことを言い終わっている文（「言い終わり」）

さらに「言い終わり」を従属節の内容と関係づけられるべき内容が文脈上に存在するかどうかで次のように分類している。

(2) a. 関係づけられるべき事態が文脈上に存在する文（「関係づけ」）
　　b. 関係づけられるべき事態が文脈上に存在しない文（「言い尽くし」）

この分類に従うと、「言い残し」「関係づけ」「言い尽くし」の例は次のようなものだと考えられる。

「言い残し」の言いさし文は次のようなものである。[1]

(3) カツオ「ええ！出張？」
　　タイコ「急に決まったって連絡があったのよ。」
　　カツオ「それで帰ってくるのは？」
　　タイコ「それが来週なの。」
　　カツオ「来週。」
　　タイコ「カツオちゃんに謝っといてくれって言ってたけど。」
　　カツオ「あ、いえ…もういいんです。」

（「読書のすすめ」）

(4) フネ「あらお父さん、あんまり召し上がってないみたいですけど。」
波平「あ、いやいや。」
サザエ「おでん屋さんのおでんじゃないとおいしくないかしら。」

（「おでんに誘われて」）

「関係づけ」の言いさし文は次のようなものである。

(5) サザエ「そうね。ところでサブちゃん、他に何かいいことがあったんじゃないの？」
サブちゃん「え、わかりますか？」
サザエ「サブちゃんはすぐに顔に出るから。」

（「タラちゃん春です」）

(6) フネ「遅かったね。」
サザエ「図書館まで回ってきちゃったから」　（「顔に出るマスオ」）

そして、「言い尽くし」の言いさし文は次のようなものである。[2]

(7) 伊佐坂先生「磯野さん、夕方のニュースはご覧になりましたか。」
波平「は？　ニュースの時間は停電じゃなかったですか。」
伊佐坂先生「停電？　それでその磯野さんはろうそくの話をされたんですか。」
波平「うちは電気が消えて。」
伊佐坂先生「我が家はずっとついてましたが。」
波平「では停電はうちだけで。」

（「我が家は消灯中」）

(8) カツオ「あの、僕はそろそろ。」
花沢「まだいいじゃないの。本屋さんでばったり会ったのも縁があるからじゃない。」
カツオ「でも。」
花沢「父ちゃんが帰ったらカツ丼でも取るから。」
カツオ「カツ丼！」

（「理想のマスオさん」）

白川（2009）は「言い残し」の言いさし文を対象外とし、「言い尽くし」の言いさし文としては「けど」節、「から」節、「たら」「れば」節」を中心に、「関係づけ」の言いさし文としては「から」節、「し」節、「て」形節を中心に記述している。そこでは従属節の形式によって言いさし文のタイプが異なることは積極的に触れられていないようである。

本稿は、この点を重視し、従属節の形式によって言いさし文が非言語的な要素（主節）とどのように関係づけられるかを観察するという語用論的な意味記述を行う。したがって、(5)（6）のような言語的な文脈に依存している「関係づけ」の言いさし文は扱わず、(3)（4）のような「言い残し」も（7）（8）のような「言い尽くし」も従属節の事態と非言語的な要素との間になんらかの関係があると考える。このように考える背景には、言いさし文は主節が非言語的な要素となっていると考えるからである。本稿ではこのような主節は「非言語的に表現されている」あるいは「言語的に表現されない」あるいは「言語化されない」と表現することにする。

また、非言語的な要素には、「非言語な事態」と「非言語的な発話態度」の二種があるとし、節を分けて記述する。

記述対象とするのは、「のに」節、「のだけど」節（「のだが」等も含む。）「から」節、「けど」節（「が」等も含む）である。

1. 非言語的な事態との関係性

ここでは、主節が非言語的に表現されているとき、従属節の事態とどんな関係の事態が暗示されるかを記述する。

ここで記述するのは「のに」節、「のだけど」節、「から」節である。

1. 1 「のに」節

ここでは、主節が言語化されないとき、「のに」節の事態と対立的な事態が暗示されるという現象を観察する。

「のに」節の事態には、過去の事態、望ましい事態、通常の事態の3類型がある。以下、順にこれらを見ていく。

1. 1. 1 過去の事態（「のに」節）と対立的な現在の事態

次は「のに」節が過去の事態を表し、それと対立的な現在の事態が主節で言語化されない例である。

(9)（ウサギを怖がっていた浅沼に対して）

カツオ「へえ、抱けるようになったんだ。あれだけ怖がってたのに。」

浅沼「磯野君のおかげよ。もう一人でウサギの世話ができるわ。」

カツオ「良かったね。苦手なものが一つなくなって。」

浅沼「ありがとう。」

カツオ「もう少し一緒に飼育当番やっていたかったのになぁ。」

（「ウサギが笑った」）

従属節には「浅沼はウサギを怖がっていた」という過去の事態が表され、それと対立する「浅沼はウサギを怖がっていない」という現在の事態が主節で言語化されていない。また、従属節には「カツオは浅沼ともう少し飼育当番をしていたかった」という過去の事態が表され、それと対立的な「もう一緒に飼育当番ができない」という現在の事態が主節で言語化されていない。後の方の例は過去の願望と現在の状況が対立的な例だが、他に、過去の意志と現実が対立する例も見られる。

(10) サザエ「あなた、遅かったのね。」

マスオ「うわあ！サ、サザエ、いや、ごめんよ。アナゴくんに無理やり誘われて。」

サザエ「待ちくたびれたわ。あなたにこの姿を見てもらおうと思ったのに。」

（「わが家の用心棒」）

(11) サザエ「停電のことだけど。」

波平「お、ついたのか。せっかくろうそくの灯りで対局しようと思ったのに。行ってくる。」

（「我が家は消灯中」）

これらの例は、「〜しようと思った」という過去の自己の意志が従属節に表され、それと対立する現状の事態が主節で言語化されない言いさし文である。

（12）サザエ「父さん絶対におでん屋さんに寄ってこないって言ってたのにね。」
マスオ「おでん屋さんじゃないかもしれないよ。」
（「おでんに誘われて」）

（13）カツオ「マスオ兄さん何だって？」
サザエ「連休に入るとしばらく顔合わせられないからって。」
ワカメ「今夜話すって言ってたのに。」
タラオ「つまんないです。」
（「連休万歳」）

さらに、これらの例は、他者が過去に約束したこと（つまり他者の意志）が従属節に表され、それと対立する現在の事態が主節で言語化されないていない。

1. 1. 2 望ましい事態（「のに」節）と対立的な事態

次は「のに」節に望ましい事態が表され、それと対立的な事態が主節で非言語的である例である。

（14）ワカメ「忘年会なんかなければいいのにね。」
（「忘年会シーズン到来」）

（15）サザエ「言わなくてもわかるじゃないの。マスオさんのように雨宿りしてくればよかったのにね。」
（「マスオアリバイ工作」）

（16）波平「マスオ君も早く帰って来れば、このおでんで飲めたのに。」
（「おでんに誘われて」）

（17）マスオ「一応接着剤で直してみたんだけどね。
カツオ「はあ、僕だったらもう少し上手く直したのに。」
（「タラちゃん茶道入門」）

これらの例はいわゆる反事実的条件文の後件に現れる「のに」であり、「残念さ」を表す話し手の態度が現れるが、それが理想と現実の関係から二次的に生じる意味であると考えると、他の「のに」節と同様に扱うことができ、利点が大きい。

次の例はこのタイプの変種だと考えられる。それぞれの「のに」節に直接望ましい事態が表現されているわけではない。

(18) ワカメ「やめて二人とも。喧嘩したらお母さんがかわいそうじゃない。」
フネ「わ、ワカメ。」
ワカメ「お母さんせっかく若くなったのに。」
（「母さんは勉強中」）

(19) サザエ「編み物教室は男子禁制よ。」
カツオ「ちぇ、タラちゃんはいるのに。」
（「カツオ手編みが怖い」）

これら例の論理関係はそれぞれ「フネが（英語の勉強をして）若くなった」なら「みんなが喜ぶ」はずである。しかし、「サザエとカツオが喧嘩している」。「男のタラオは教室にいる」なら「男のカツオも教室にいてもいい」はずである。しかし、カツオは教室には入ってはいけない」。したがって、それぞれ「お母さんが若くなったならみんな喜ぶはずなのに、サザエとカツオが喧嘩している」「タラちゃんがいるなら僕もいていいはずなのに、僕だけ入れない」とパラフレーズできる。（ゴマ点部のみが従属節で言語化されている。）このことから、これらの「のに」節には当然そうあるべき事態の前提が表され、それと対立的な事態が主節で言語化されていないと考えることができる。「当然そうあるべき事態」は「望ましい事態」に含まれる。

1. 1. 3 通常の事態と（「のに」節）と対立的な事態

次は「のに」節に通常の事態が表され、それと対立的な事態が主節で非言語的な例である。

(20) ワカメ「ついてなかったわね、お兄ちゃん。」
カツオ「二人揃って家へ来るなんて滅多にないのに。」
（「理想のマスオさん」）

(21) フネ「それにしてもそろそろ帰ってこないと会社に遅れるのにね。」
（「マスオ朝のアイドル」）

これらの例では、それぞれ「かおりちゃんと早川さんが二人揃って家へ来ることは普通ない」という通常の事態が従属節で表され、それと対立する「彼女たちが二人揃って家へ来た」という事態が主節で言語化されていない。「普通この時間

に帰ってこないと会社に遅れる」という通常の事態が従属節で表され、それと対立する「マスオはこの時間になってもまだうちに帰ってきていない」という事態が主節で言語化されていない。

以上、「のに」節の言いさし文では、主節では「過去の事態と対立的な現在の事態」「望ましい事態と対立的な事態」「通常の事態と対立的な事態」が言語化されず、言いさし文によって「**対立的な事態**」が暗示されることを見た。

1. 2 「のだけど」節（「のだが」等を含む）

ここでは、主節が言語化されないとき、「のだけど」節の事態にもかかわらず生じる不可抗力の事態が暗示されるという現象を観察する。

主節で言語化されないのは、「〜てしまった」で表現されるような事態や、「為すすべなし」あるいは「〜できない」と表現されるような事態である。

次は主節で言語化されない事態が「〜てしまった」で表現されるような不可抗力の例である。

(22) サザエ「カツオたち頑張って起きていたんだけど。」

（「連休万歳」）

(23) サザエ「まだ帰ってないわよ。

マスオ「僕より先を歩いてたんだけど。」

サザエ「気がつかずに追い越しちゃったんじゃないの。」

（「おでんに誘われて」）

(24) フネ「またおでん屋さんですか。」

波平「今日は、うん、そのつもりじゃなかったんだが。本当なんだよ。」

（「おでんに誘われて」）

これらの例ではそれぞれ「カツオたちは眠ってしまった」「マスオは波平を見失ってしまった」「波平はついおでん屋に入ってしまった」といった不可抗力の現在の事態が暗に示され、主節で言語化されていない。

次は、主節で言語化されない事態が「為すすべなし」で表現されるような不可抗力の例である。

(25) フネ「あらお父さん達は？」
サザエ「何度も呼んでるんだけど。父さん、マスオさん。」
フネ「ごはんですよ。」
（「こたつ依存症」）

(26) 波平「カツオ。まだ起きとるのか。」
カツオ「僕の緊張することって何だろうと考えていたら眠れなくて。」
波平「勉強もそれくらい考えれば眠くならずに済むんだが。」
（「カツオ眠りの園」）

(27) 波平「なんだ。もう寝とるのか。」
サザエ「タラちゃんを寝かしつけてて自分も。」
波平「そうか、将棋でも誘おうかと思ったんだがな。」
（「酒と波平」）

これらの例ではそれぞれ「波平もマスオも食卓に来ない。為すすべなしだ。」「カツオはほんの少ししか勉強をしない。為すすべなしだ。」「マスオはタラオと一緒に寝てている。為すすべなしだ。」といった不可抗力の事態が主節で言語化されていない。

次は、主節で言語化されない事態が「どうしても〜できない」とパラフレーズできるような不可抗力の例である。

(28) カツオ：どうも様子がおかしいと思った。
マスオ「一応接着剤で直してみたんだけどね。」
（「タラちゃん茶道入門」）

(29) マスオ「誰ですか今の人。」
波平「さあわからん。」
マスオ「えー、だって挨拶していたじゃないですか。」
波平「うーん、どっかで見たような気がするんだが。」
（「どこかで見た人」）

これらの例ではそれぞれ「マスオは壊れた茶碗をどうしても修復できない」「波平はどうしても誰だったか思い出せない」といった不可抗力の事態が主節で言語化されていない。

以上、「のだけど」節の言いさし文では「**不可抗力の事態**」が暗示されることを見た。

1. 3 「から」節

ここでは、主節が言語化されないとき、「から」節の事態から必然的に生じる事態が暗示されるという現象を観察する。

次は「から」節の事態によって生じる自ら／他者の行為が必然的であるということが暗示される例である。

(30) ノリスケ「ああ、夕飯の献立ですか。フランス料理とはまた豪勢ですね。」
サザエ「あ、私、用事があるから。」
ノリスケ「サザエさん？」
（「すごいキノコがやってきた」）

(31) フネ「まぁ甚六さんが。」
マスオ「たまたま買い物に来てくれていたおかげで助かりました。」
フネ「マスオさんは見て見ぬふりできませんからね。」
（「マスオ気遣い帳」）

(32) ノリスケ「あれ、カツオくん。そんなところで何してるんだい。」
カツオ「う、うん。雲があんまり綺麗だから。」
ノリスケ「ははははは。また何かやらかして立たされてるんだろう。」
（「カツオ立たされ日和」）

これらの例ではそれぞれ「（私は用事があるから）絶対に今行かないといけない」「（マスオは見てみぬふりができないから）困っている人がいると必ず助ける」「（雲があまりににも綺麗だから）眺めざるを得ない」といった必然的な事態が主節で非言語的に表現されている。

次は「から」節の事態によって必然的に生じる認知能力が主節で非言語的に表現される例である。

(33) タラオ「ふん、僕の茶碗じゃないです。」
サザエ「そんなことないわよ。こういう形のお茶碗はひとつしかないのよ。」
タラオ「模様が違うです。」

フネ「模様ってどこが違うんだい？」
カツオ「そうか、タラちゃんは頼むたびに穴の開くほど眺めていたからね。」
（「タラちゃん茶道入門」）

(34) ノリスケ「あの事件と言われてもサザエさんの場合、事件が多すぎるからね。」
（「ママはおてんば娘」）

これらの例ではそれぞれ「（タラオは穴の開くほど眺めていたから）茶碗の模様をよく覚えている」「（サザエには関わる事件が多すぎるから）すべてを覚えていることができない」といった必然的な認知能力が暗示されている。

以上、「から」節の言いさし文では「**必然的な事態**」が暗示されるという現象を観察した。

2. 非言語的な発話態度との関係性

ここでは、主節が非言語的に表現されているとき、どんな話し手の発話態度、あるいは内面が暗示されるかを記述する。

話し手の内面にある発話態度が言語化されないところから、終助詞のようなモダリティ形式と同様の機能を持つと考えられる。

ここで記述するのは「けど」節、「のだけど」節、「から」節、「のだから」節である。

2. 1 「けど」節（「が」等も含む）

ここでは、主節が言語化されないとき、「けど」節によって、相手の発話意図が話し手にとって不明、あるいは相手の主張が話し手の認識と異なり、相手に対する疑念、疑問、確認が暗示されるという現象を見る。

まず、相手の発話意図が話し手にとって不明なときの例は次の通りである。

(35) サザエ「あ、ワカメ、父さんから話があるみたいよ。」
波平「ええ！」
ワカメ「なあに、お父さん。」
波平「うっ、イクラちゃんは元気だったか？」

ワカメ「元気だったけど…。」
フネ「ワカメ、実はねカツオが公園で堀川くんにあったらしいんだよ。」
ワカメ「堀川くんに？　ふえーんうわーんあーん。」
カツオ「ん？我が妹はついに厳しい現実を知ってしまったか。」

（「ワカメ秋の晴れ舞台」）

(36) カツオ「すごいケーキ！」
サザエ「カツオのために買ってきたのよ。」
カツオ「ジュースもある。」
サザエ「食べ終わったら縁側に来てね。」
カツオ「なんか不吉な予感はするけど。ごちそうさま。」
サザエ「そこに座って足を投げ出して。」
カツオ「ん？こう？」
サザエ「そう。」
カツオ「何するの。」
サザエ「姉さんががさっぱりさせてあげるのよ。」
カツオ「うわあ、バリカン。」
サザエ「待ちなさい！」

（「姉さんバリカン日より」）

(35) では「波平がイクラのことをワカメに尋ねた」意図と「ワカメが波平からの話」で想定した意図に食い違いがあり、話し手（ワカメ）がその発話意図に疑念を呈している。(36) では「サザエの誘い」が果たしてどういうことか、話し手（カツオ）にとっては発話意図が不明である。それは主節に「どういうことか」を補えることから明らかである。これらから主節で言語化されないのは、話し手の**相手に対する疑念や疑問**であると言える。

次の例もこのタイプと考えることができるだろう。

(37) カツオ「あ！　見たか、中島。」
中島「おまわりさんみたいだったけど。」
カツオ「確かに制服を着てたよな。」

（「憧れのバスガール」）

(37) では話し手（中島）は「カツオには車に乗っているその女性が何に見えたか」判然としないまま返答している。したがって、主節で言語化されないのは「カツオ、お前はどう思ったか」といった話し手の疑問であると言える。

次に相手の主張が話し手の認識と異なるときの例を観察する。

(38) 男性「いつも伺ってる集金人ですよ、奥さん。髭を蓄えたんです。」
フネ「何だか違うようだけど。」
サザエ「確かに怪しいわ。」
（「どこかで見た人」）

(39) マスオ：参ったね。仕事の交渉ごとまで顔に出ちゃうなんて。
サザエ：それだけマスオさんは正直者ってことじゃないの。
マスオ：世の中正直だけじゃ生きていけないよ。
フネ「そうかしら。私は素敵だと思うけど。」
（「顔に出るマスオ」）

(40) 波平「はっはっはっは。しかし間の抜けた泥棒もいるもんだな。」
カツオ「もし僕だったら伊佐坂先生の家にするけどな。」
（「どこかで見た人」）

これらは (35) 〜 (36) のような疑問や疑念を呈する段階ではもはやなく、他者に対して自論を説いている点で異なる。(39) (40) のように他者に対峙させるように「私は」「僕だったら」のような対比がなされる場合が多い。主節で言語化されないのは「自分はこう思うがどうだろう」といった**自論の正当性の相手への確認**といったところだろう。

以上、「けど」節の言いさし文では話し手の相手に対する疑念や疑問や自論の正当性の相手への確認が主節で言語化されず、総じて「**相手に対する疑念、疑問、確認**」が暗示されるということを観察した。

2. 2 「のだけど」節（「のだが」等を含む）

「けど」節については前小節で見たが、「のだけど」節はそれとは違うようである。ここでは、主節が言語化されないとき、「のだけど」節で相手に対する依頼、要求、提案などが表され、相手に対する承諾の確認が暗示されるという現象を観

察する。

次は「話がある」あるいは「頼みがある」として相手に対して依頼要求を表明する例である。

(41) カツオ「ちょっと話があるんだけど。」
ノリスケ「お金のかからない場所でなら聞いてもいいよ。」
（「顔に出るマスオ」）

(43) サザエ「足りない分は後で私が買ってくるわ。それよりあんたに頼みがあるんだけど。」
（「カツオ人生論」）

いずれの例も相手の承諾を得ることによって初めて具体的な依頼内容が伝えられることから、主節で言語化されないのは話し手の**相手に対する承諾の確認**であると考えられる。

次は自分の認識を表明しながら、事態の改善要求をするときの例である。

(44) カツオ「姉さん僕のハンバーグみんなのより小さい気がするんだけど。」
サザエ「当然よ。あんたさっきお駄賃せしめたでしょう。」
（「タラちゃん買い物上手」）

(45) ノリスケ「よしよし。ああ、イクラ。」
カツオ「返って目立つんだけどなー。」
（「カツオ立たされ日和」）

これらの例ではそれぞれ「カツオの小さいハンバーグ」についての事態改善、「立たされているカツオの横にイクラが一緒に立とうとしている」という事態からの改善を要求している。このことから主節で言語化されないのは話し手の**相手への事態改善要求に対する承諾の確認**であると考えられる。

「のだから」節は相手への要求だけではなく、相手に勧めるときにも用いられる。

(46) サザエ「あなたケーキがあるんだけど。」
マスオ「もう歯を磨いちゃったよ。」
サザエ「じゃ明日ね。」
（「あうんの呼吸」）

この例では「ケーキを食べるかどうか」という話し手の相手に対する提案がなされることから、主節で言語化されないのは話し手の**相手への提案に対する承諾の確認**であると考えられる。

以上、「のだけど」節の言いさし文では話し手の「**相手に対する承諾の確認**」が暗示されるということを見た。

2. 3 「から」節

非言語的な事態と関係を持つ「から」節は従属節の事態から必然的に生じる事態が暗示されたが、ここで観察する「から」節はそれとは違うようである。

ここでは、主節が言語化されないとき、「から」節で話し手についての事態（原因）が表され、その結果生じる相手にとっての都合のよさ／都合の悪さが暗示されるという現象を観察する。

2. 3. 1 相手にとって都合のよさ（あるいは都合のよい依頼）

まず、「から」節に話し手の負担が表現され、その結果必然的に相手に都合がよい事態が生じるときの例を見る。

(47) 薬剤師：あら、いらっしゃいタラちゃん。一人でお買い物？
タラオ：はいそうです。
薬剤師「偉いわ。今歯ブラシ出しますからね。」
（「タラちゃん買い物上手」）

(48) マスオ「タラちゃん、舌を火傷しないように冷ましたからね。」
タラオ「どうもです。」
（「マスオ気遣い帳」）

(49) ワカメ「私が選んであげるから。」
波平「ワカメがか？」
ワカメ「女の目を信じなさい。」
（「ワカメお目が高い」）

これらの例ではそれぞれ話し手が「歯ブラシを出すことによってタラオは買い物ができる」「揚げ物を冷ましてあげたことによってタラオは舌をやけどしない」

「ネクタイを選ぶことによって波平はセンスがいいと見られる」などといった（話し手にとって）必然的な結果が想定できる。そのときは話し手の行為提供と同時にそれぞれ「もうちょっと待ってくれ」「食べてくれ」「期待してくれ」などといった**相手にとって都合のよい依頼**が主節で言語化されていないとひとまず考えておく。

次も前の例と同様に相手にとって都合のよい依頼が主節で言語化されていない例とも考えられる。

(50) ワカメ「お兄ちゃん、ノリスケおじさんから電話よ。」
カツオ「もしや。」
ノリスケ「引き延ばしてみないとはっきりしないけどネガを見るとハンカチで涙をふいているように見えるね。」
カツオ「ありがとう。ノリスケおじさんにもお礼をするからね。」
（「父さんが泣いた日」）

この例では「から」節で「ノリスケに礼をする」という話し手（カツオ）の負担を表し、相手（ノリスケ）に「波平がサザエの結婚式で涙を流した証拠写真を現像してくれる」ように依頼しているという場面である。ただし、話し手の「ありがとう」という感謝表現からそれはすでに依頼済みであることは明らかであるので、ここでは「よろしく」といった依頼の再確認が言語化されていないと考えるか、あるいは次の例のように単なる相手にとっての都合のよさが言語化されていないと考えるかのいずれかである。

(51) 肉屋「まだ幼稚園にも行ってないのにママの代わりに買い物するなんて大したもんだ。コロッケをサービスしとくからね。タラちゃん大好物だろう。」
（「タラちゃん買い物上手」）

この例では「から」節で「サービスする」という話し手の負担を表しながら、相手になんらかの依頼をしているようには解釈できない。となると、話し手の負担から必然的に生じるのは相手の利益である。

したがって、(47) 〜 (51) において主節で言語化されていないのは必然的な**単なる相手にとっての都合のよさ**と考えた方がよさそうである。

2. 3. 2 相手にとっての都合の悪さ（あるいは都合の悪い依頼）

先に相手にとっての都合のよさ（あるいは都合のよい依頼）が暗示される言いさし文を観察したが、ここでは反対に、相手にとっての都合の悪さ（あるいは都合の悪い依頼）が言語化されない場合を観察する。

次は「から」節に話し手に都合のよい行為が表現され、その必然的な結果として相手にとって都合の悪い依頼となる例である。(47) 〜 (51) では「から」節に話し手の負担が表されていたのと対照的である。

(52) (アナゴ宅前で)

アナゴ「それじゃフグ田君、僕は酔っ払っているからね。」

マスオ「えー！アナゴ君！」

(玄関で)

アナゴ妻「まあまあフグ田さんいつもすみません。」

マスオ「あーいえいえ。かなり酔われているようですから寝かせてあげてください。」

(「忘年会シーズン到来」)

この例では話し手（アナゴ）は「酔っ払っている自分をマスオが家まで連れて返ったとすると、自分の女房は少なくともその場で遅く帰宅したことを咎めないだろうから、酔っ払っているふりをする」という自分にとって都合のよい勝手な行為をすることによって必然的に相手にとって負担のかかる都合の悪い依頼を行うことになる。ここで言語化されないのは、**相手にとって都合の悪い依頼**である。

先に相手にとって都合のよさが言語化されていない例を見たが、次はその反対となる例で、**単なる相手にとっての都合の悪さ**が言語化されていないとも考えられるし、相手にとって都合の悪い依頼の部分が残っているとも考えられる例である。

(53) ワカメ「ところでお兄ちゃん、私も鶏の飼育当番があるんだけど手伝ってくれない？」

カツオ「冗談じゃない。いやだよ。」

ワカメ「あっそ。じゃあいいわ。今見たことお姉ちゃんに喋っちゃうか

ら。」

カツオ「分かったよ。手伝うよ、手伝います。」

（「ウサギが笑った」）

相手にとって都合の悪い依頼が言語化されていないと考えると、「飼育当番を手伝ってくれたら、今見たことをサザエに話さない。さもなければ、今見たことをサザエに話す」という話し手（ワカメ）にとって都合のよい勝手な行為を「から」節で表しながら、「飼育当番を手伝ってくれ」といった依頼の読みができる。依頼の読みをしなければ、「今見たことをサザエに話せば」相手にとって都合が悪いだろうという読みができる。いずれも相手に対する脅しの解釈になる。

次は相手に対する依頼の読みができない例である。

(54) タラオ「リカちゃんより僕の方がお買い物上手です。ばいばーい。」

リカ「何よ。あたしだって負けないから。」

（「タラちゃん買い物上手」）

話し手（リカ）が「一人で買い物することに関してタラオに負けない」という宣言をすることは相手（タラオ）に何らかの依頼をするわけではない。この状況が成立すると必然的に「タラオは偉そぶることができない」という相手にとっての都合の悪さを暗に表現していると考えられる。したがって、ここで主節で言語化されないのは**相手にとって都合の悪さ**であると言える。

以上、「から」節の言いさし文では総じて必然的に生じる「**相手にとっての都合のよさ、あるいは相手にとっての都合の悪さ**」が暗示されるということを見た。

2. 4 「のだから」節

「から」節の言いさしは、必然的な事態や相手にとっての都合のよさ、あるいは都合の悪さが暗示されるということを見てきたが、ここで見る「のだから」節の言いさしはこれらとはだいぶ違うようである。

ここでは、「のだから」節では、相手について事態が原因として表され、その結果生じる相手に対する不満が暗示されるという現象を見る。

(55)（カツオがとっさに消えたことに対して）

サザエ「本当に逃げ足が速いんだから。きっとタイコさんの所へ避難したんだわ。」

（「カツオ立たされ日和」）

（56）（頭を刈らせてもらった代償としてカツオが小遣いをねだったのに対して）

サザエ「あー、漫画本一冊くらいなら。」

カツオ「二冊分でどう？」

サザエ「すぐ足元を見るんだから。」

（「姉さんバリカン日より」）

（57）カツオ「恩に着るよ花沢さん。」

花沢「他人じゃないんだから。」

（「姉さんバリカン日より」）

話し手はそれぞれ「カツオがすぐ逃げたこと」「カツオがすぐ足元を見て要求を上げたこと」「カツオが他人にするような感謝の言葉を述べたこと」に対して批判的である。しかし、話し手はこの発話によって事態を改善させようとしているわけではない。むしろ、主節で言語化されないのは自分の思う通りに行かないことへの**相手に対する不満**であると考えたほうがよいだろう。

以上、「のだから」節の言いさし文では総じて相手についての事態の結果生じる「**相手に対する不満**」が暗示されるということを見た。

3. 終わりに

以上、従属節の形式によって非言語的な要素との関係が異なることを観察してきた。本稿は非言語的な要素を「非言語的な事態」と「非言語的な発話態度」に大きく分け、それぞれに該当する形式について記述してきたが、最後に形式ごとにまとめておく。塗りつぶしたところは非言語的な発話態度であり、塗りつぶしていないところは非言語的な事態である。

（58）逆接表現

逆接表現	主節で言語化されない要素
「のに」節	対立する事態
「けど」節	相手に対する疑念, 疑問, 確認
「のだけど」節	不可抗力の事態
	相手に対する承諾の確認

（59）原因・理由表現

原因・理由表現	主節で言語化されない要素
「から」節	必然的な事態
	相手にとっての都合のよさ／悪さ
「のだから」節	相手に対する不満

このように形式によって主節で言語化されない要素（暗示される内容）に傾向性が見られることも興味深い[3]。

本稿は覚書として書き留めたものなので、関連する語用論的理論については論述していない。しかしながら、主節を言語化しないということは、Grice の量の格率、Leech の気配りの格率、寛大さの格率、是認の格率、合意の格率などと関連する現象であると思われるし、ここでは発話態度と呼んだところに関しては関連性理論でいうところの高次表意、推意、あるいは手続き的な意味と関わる現象だと思われる。これらに関しては今後の課題としたい。

註

1 本稿では（3）（4）の「けど」節は「相手に対する疑念、疑問、確認」を暗示する非言語的な発話態度と関係すると考える。白川（2009）の「言い残し」は「けど…」と中途で終わる文、「言い尽くし」は終助詞「よ」などに言い換え可能な文と考えている。

2 本稿では（7）の「が」節は（3）（4）と同様に「相手に対する疑念、疑問、確認」を暗示する非言語的な発話態度と関係すると考える。したがって、白川（2009）では「言い残し」と「言い尽くし」の区別が難しいと考える。また、（8）の「から」節は「相手にとっての都合のよさ」を暗示する発話態度と関係すると考える。

3 先行研究では言いさしの「けど」「のだけど」、「から」「のだから」の違いに関してあまり注目が払われていないように思われる。例えば、グループ・ジャマシー（1998）では「…けれど」の文末用法の例文に二つの形式が現れている（p. 109）。
さらに、日本語には前置き用法として「…けど」と「…のだけど」の選択などに関わる現象が見られるが、本稿の結果に従うと、後者は相手の承諾を確認する必要があり、前者は承諾を得る必要がなく、単に確認するときの前置きと考えることができる。例えば、「悪いけど」と「悪いんだけど」の用法を考えると、相手の承諾を得なければならない「悪いんだけど」から始まる依頼は丁寧な依頼となり、その必要のない「悪いけど」から始まる依頼は不躾な依頼となるということにも関係すると思われるが、このことについても今後の課題としておく。

用例出典

「サザエさん傑作選 2005」Prime Video 配信

参考文献

グループ・ジャマシー . 1998.『日本語文型辞典』東京 : くろしお出版 .

白川博之 . 2009.『「言いさし文」の研究』東京 : くろしお出版 .

Grice, P. 1975. Logic and conversation. In P. Cole and J. Morgan (eds.), *Syntax and Semantics 3: Speech Acts* (p. 41-58). New York: Academic Press.

Leech, G. N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Sperber, D. and Wilson, D. 1986. *Relevance: Communication and Cognition* (2nd ed.: 1995). Oxford: Blackwell.

付記：
本研究は JSPS 科研費 JP19H01262 の助成、および大阪大学日本語日本文化教育センター特別研究費Ⅱの助成を受けたものです。

〈キーワード〉　言いさし文、非言語的事態、非言語的発話態度、insubordination

A Note on Pragmatics of Insubordination in Japanese

NAKATA Hitoshi

This paper deals with insubordination in Japanese in the field of pragmatics. The main idea of this paper is that the context behind the utterance can be classified into linguistic context and non-linguistic context, and that the latter can be subclassified into non-linguistic state of affairs and non-linguistic speaker's attitude toward his opponent. The main phenomenon of insubordination in Japanese are taken up for discussion in this paper.